

学生時代と今の時代

鈴木, 元衛
元東京大学学生 | 日本原子力研究所

<https://doi.org/10.15017/1660019>

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp.208-212, 2015-03-31. Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



学生時代と今の時代

鈴木 元衛

服部さんは私と同じく、大学一年の春にボート部に入った新入生の一人だった。私は理科一類、彼は文科三類で、指向分野はいわば互いに一番離れていた。彼は駒場の教養学部キャンパス内の駒場寮で、学生生活を開始した。初めて彼を見たときは、金太郎のような人なつこい風貌の筋肉質の体格で、ボートを漕ぐのには自分のようなヒョロヒョロ人間より、はるかに適しているんだろなあと感じた。私は埼玉県戸田市にあるボート部の合宿所で大勢の部員と暮らすなかで、彼を含む多くの部員と自然に親しくなっていた。七月頃、一年生を満載した六隻のナツクルシックス（練習用の頑丈なボート）で合宿所を出た我々は、船尾に立つ先輩の号令にしたがつて、ヒイヒイ言いながらオールを漕ぎ、荒川を下り、放水路を通って江戸川を遡り、市川市に一泊し、翌日、同じコースを逆方向で合宿所に戻った。これで体重が一気に五キロ減った私にとっては、もう死ぬような思いであつたが、彼はタフにやり過ぎたのだらうと思う。

その後しばらくして東大闘争が激しさを増し、新入生であれ何年生であれ、否応もなくその嵐の坩堝に巻き込まれざるを得なくなつた。彼は全共闘に共鳴し、その学生たちの一員となつていき、私はいわゆる民青系のシンパの一般学生とともに、行動するようになっていった。その頃を思い出せば切りがないが、あのような大学闘争は、おそらく日本史上唯一無二であろうから（今後は起きないであろうから）、ここでエピソードを紹介させてもらい、私が個人的に感じた当時の雰囲気の後世に伝えようと思う。もちろん服部さんは、全然異なつた光景を見ていただらうことは言うまでもない。すべては四十六年の過去、何があつたとしても、もはや時効である。

一九六九年の冬、後から思えば東大闘争も終局的な段階にさしかかつた頃、数十人の学生が教養学部の建物の一つを、バリケード封鎖して立てこもつた。バリケードは一階と二階をつなぐ階段に、教室から持ち出した椅子や机を、針金で何重にも連結して作られていた。封鎖の学生は二階とその上の階に立てこもつたのだつた。建物をとりまく学生と、封鎖の学生との間に、投石合戦が繰り返された。私は封鎖の学生が、屋上からバラバラとゲンコツ大く子供の頭大の石を降らせる中、建物の一階に突入して配電盤のスイッチをすべて切つた。私の横にいた学生の頭には石が当たつて、頭髮の間から頬や耳たぶの上に鮮血がたらたらと流れ落ちていた。投石合戦の後、多くの学生はその建物を日夜取り巻いて兵糧攻めにした。冬の寒い夜、たき火にあたりながら建物を監視していると、遠くの路上の闇の中から、大きな包みを持つたやつがこっそり近づいてきた。すぐに数人で取り押さえたらそれは四角な食パンだったので、分捕つた。キャベツを丸ごと抱えてくるやつもいたが、当然そのキャベツも捕獲物となつた。

数日後、立てこもっていた学生たちがフラフラして、それでも必死にデモの隊列を組んで、一斉に「〇・〇・粉・砕」とか叫びながら出てきたとき、服部さんはその中の一人であつた。

デモの隊列は建物の外で待ち構えていた大勢の学生にわつと取り囲まれ、惨めにもたちまち一人一人引き離されてしまった。一部の学生は逃走した。彼は数人の学生に両腕をつかまれ、蹴られ、体をぐらぐらさせながら顔をゆがめて、半分泣きべそのような声で激しく空しい抗議を試みていた。近くにいた私には「ボクはXX

XXなんだよう〜」と聞こえた(XXXは聞き取れず)。タフなはずの彼がそのような情けない声を出すとは驚きだった。後でわかったのだが、彼は足をくじいてたらしい。

私はその直後、寮に行き、ボート部のK君(文科一類)に「服部が捕まったぞ! 両腕を掴まれてこんなぐらした格好をしていた」と仕草を交えて言うのと、K君はとたんに大喜びになって「オーッ、服部が捕まったか。ザマあみろってんだ、あいつら封鎖なんかやりやがつて」と叫び、すぐにもう一人のK君(理科一類)を呼んできて「おい鈴木、今の格好をもう一度やってみろ」と言うので私がもう一度その時の格好をまねると、両K君はまたしても手放して大喜びであった。

誤解のないように断っておくが、誰も服部に個人的な恨みを抱いていたわけでは全くない。それどころかみな彼が好きであった。しかし当時は既に多くの学生に、投石やゲバ棒による学内の衝突に対して厭戦気分が広がり、にもかかわらず強硬に建物封鎖をして大学の機能を止める戦術をとる全共闘には嫌気がさし、むしろ敵意さえ抱いていた。要するに全共闘は浮き上がったしまつていたのであった。

しばらくして彼は寮の自分の部屋に戻ってきた。彼は捕まった後、寮の食堂へ連れて行かれて自己批判書なるものを書かされてから、解放されたのだそうだ。私が部屋の様子を見に行くと、彼は医者からもらった捻挫の薬を飲もうとしていたが、錠剤をプラスチック包装から取り出す方法を知らなくて、端っこのアルミ箔を剥がそうとしていたので、私が「いやこの薬は押せばプチッと出てくるんだよ」と教えた。自己批判書にはウソの名前を書いたんだ、としきりに言っていた。

そういう風に、彼と私は互いの政治集団に入って行動しているときは水と油以上の憎き敵対関係であったが、駒場寮にいたときは、議論はかみ合わないものの、なぜか互いに(彼の言葉で言えば)なれ合っていた。そして房総半島に一泊旅行をしたり、登山したりというつきあいをしていた。房総半島から帰る電車の車窓から、大小の銀白色の配管が縦横に走った大きな化学プラントが見えた。私が「あそこに

無機物の有機的結合がある」と言ったら、彼はなぜかその言葉が気に入ったらしく「無機物の有機的結合ね、よし覚えておこう」と感心したように言った。また、彼に連れられて山梨県の山でテントを張って一泊したのは、私にとって初めての経験であった(服部補注*笛吹川東沢)。冬の乗鞍寮にも行った。雪に埋もれた山小屋は、彼の友人(遠山さん)の結婚式会場だった。

彼には今でも深く感謝している。その中で、今考えてみると当時私はずいぶんトゲがある狭量な性格であつて、服部さんには何度か不快な思いをさせたのだらうと、今思い出してとてもすまなく思っている。しかし私自身にとつて彼は大好きな人間の一人であつた。

彼は専門学科に進んでからは本郷通りに面した追分寮おいわけの自室に、膨大な古文書本を積み上げて生活していて、書物の重さで古い木造の部屋の床が抜けるのではないかと、私は本気で心配した。それを言うと、彼はいつものようにニヤニヤしつつもさすがに困った表情を浮かべていた。

さて大学を卒業した後、大学院を経て私は日本原子力研究所へ就職し、原子炉の安全性研究の道へ進み、彼は大学に残つて日本史の研究者としての道を進み始めた。そして、光陰を矢のごとく一気に飛ぶと、そこには退職の日を迎える二人があるのである。当時の寮は今やとくに消滅した。懐かしむすがは、先輩から教わった寮歌くらいしかない。

その現在をとりまく風景のなかで突出しているのは、二〇一一年三月十一日に起きた福島原発の事故である。これは原子力の危険性が顕在化したときに、何が生じるかをいやと言うほど見せつけてくれた未曾有の人災である。私は歴史家ではないが、三・一一は日本の文明のあり方を変える分岐点となると思っている。

たとえば今から幕末と明治維新を見ると、我々は明治維新という歴史の結果を知っているのに、幕府存続を図る新撰組や幕臣を時代の流れを見誤っていた人たちと考えるが、当時の人たちはこの先に何が来るのか誰も確たる予測はできなかった

はずだ。では今はどうだろう。脱原発はすべきか否か。私はすべきと考える。なぜならリスクが便益をはるかに上回ることが予測されるからだ。国民経済的・文明的・環境論的視点から見れば、便益よりリスクが上回ることが多くの専門家が論じている。

一方、再稼働に賛成の人たちはリスクがゼロだとまでは考えていないが、リスクは受容できる程度に低く、便益が十分上回っていると考えている。つまり原発推進派の主張の暗黙の前提となっているのは、リスク受容可能論である。原発が与える便益はまず周辺住民の短期的な経済的利益、電力会社やメーカーの経済的利益、専門家や政治家の既得権の維持・拡大、さらに専門家や技術者の、原子力の可能性に対するポジティブで強固な信念・プライドを支えてくれる効果がある。この効果は意外に大きく、原子力村を権益とともに強固にしている一因である。

しかしこれらの便益は、すべて特定の人間集団に局所的、一時的に帰属するものに限られる。このことは、誰もリスクと便益の比較を、比較を行う自己の価値観や利害関係から離れて行うこと、つまりリスクと便益の比較が、人間の意識から独立した、客観的な尺度にしたがって行われることは、原理的に不可能であることを示す。つまりリスクと便益の比較に基づいた選択の正否は、本質的には選択を行う人の願望がどこに向かっているかにかかっている。

したがって、今後の日本がどのような工業文明を選択していくかは、まさに我々の価値観にかかっているものであり、三・一一は我々の歴史感覚を鋭く問うているといえる。歴史の研究は、未来を照らすものでなければならない。歴史の専門研究者か否かを問わず、一人の知識人として、局所的、一時的に帰属するものに引きずられることなく、文明の方向を洞察しつつ状況に関わっていく姿勢こそ、我々が大学時代という疾風の日々の中で身につけた資質であろう。わかき心を持って、服部さんも私も前進あるのみ！

—— 一高寮歌 抜粋 ——

藝文の花咲きみだれ 思想の潮湧きめぐる 京に出て、向陵に 學ぶもうれし
武蔵野の 秋の入日はうたふべく 萬巻の書は庫にあり
降りつむ雪にうづもれて 春を營む若草の わかき心を誰か知る なべての眠り
さめぬとき 眞闇の中に人知れず 鳴く鶏を誰か知る

(元東京大学学生、日本原子力研究所)

*服部コメント

書き残す価値があるのかどうか。よくはわからない。が、寄稿に触発された。半世紀を経て歴史になった部分もあり、なりきれない部分もある。世界ならともかく、これからの日本の若者が、あのような経験をすることは、確かに考えにくい。

ポート部時代の友人である鈴木さんのことを、ふつう「もとえ」と呼んでいた。彼のお父さんは磐田市在住の有名な陶芸家で、彼と一緒に駒場の民芸館に行くと、入場料が無料になった。このたび原稿を依頼したところ、快諾され、第1バージョンが送られてきた。かれはわたしが知らないことをよく覚えていたので、もう少し書き足してくれと依頼した。第2バージョンには一九六九年一月のある日の駒場の詳細が、身振りまで交えて記されていた。学生運動の激化の中で、かれとは全く正反対の行動グループにいて、敵対していた。かれにとつては大勝利の日、わたしたちにとつては敗北の時間帯、恥辱の日となる。立場がちがうところなるし、場所と時間を共有しても互いに知らないことが多い。歴史だから異なる複数の見解がある。第2バージョンに「プロレタリア軍団」に勧誘されて、そこに入っていたようだ、とあったけれど、ヘルメットの色から、そう思う人がいたのだろうか。それは何かのまちがいで、当時多くの学生はセクトには入らなかったし、その名前の党派は周囲にいたのかもしれないが、自分はいらない。で、まちがいに削除すること、第3バージョン（完成稿）になった。

記憶はあまり定かではない。バリケード封鎖した建物の中にいた期間ははずいぶん長かったようにも思うし、ほんとうは短かったのかなという気もある。大学一年生の冬でわたしは一九歳、政治は晩生（おくて）で、ずっとポートを漕いでいて、秋になつておそろのおそろのデモに参加したら、一〇・八、そして一〇・二一という新宿騒乱体験となつて、一気に高揚した。バリケード封鎖はそのわずかな二ヶ月後、場所は東大駒場の第八本館、通称八本（はちほん）、四階建てくらい建物だった。クラスごとに教員・研究室に入った。私たちのクラスは43LⅢ6B（文・教育系、ドイツ語未修）といった。一学年三〇〇〇人が六〇ほどのクラスに分けられ、それが二年分あった。43LⅢ6Bは地理学の本内信蔵研究室に、寝袋で泊まった。りっぱな本がたぐさんあつて、貴重なものだろうと思った。その本に触ったり、動かしことはない。カギをどうやって開けたのかは知らない。一二月初めに封鎖した。根井豊氏の回想から推測すると、当初は

クラスの一人ほどが参加していたようだったが、次第に減っていった。最後までいたのは、このクラスでは四人だった。

数年前、乗鞍・鈴蘭小屋で東大総長と同席する機会があった。同年とわかり、わたしが八本の中にいたと思ったら、自分もいたんだ、となった。共通する記憶もあれば、知らない話もあった。その後会議の席で一緒になった時も、総長はわたしを覚えてくれた。

この暮れ、わたしは大磯ユタカさんと冬の富士山に登った。御殿場駅から歩き出し、途中でNHKの車に乗乗、カメラマンに学生運動のことを聞かれたから、クリスマス停戦といったら、笑われた（ベトナム戦争にもクリスマス停戦があった）。だから出たり入ったりしていたようだ。

一月になると、駒場寮には戻れなくなっていた。元衛くんの第一バージョンでは封鎖学生は二〇人くらいと書いてあったが、それはちがうだろう。あの建物は六本松本館よりわずかに小さい規模だったと思う。仮に二階から四階までで、各階に二〇部屋があるとして六〇部屋。四人は少ない方で、LⅢでもフランス語クラスはもと多かつたから、それなりに大人数がいた。大教室はなく、全体集会のようなものはなかった（そこが問題だったと思うが）。一度屋上に多数が集まった記憶がある。

中にいても、包囲されてしまつて、外には出られない。一月の何日か、電気も止まり水も止まり、建物からいせいに屋外に出た。黄色いヘルメットの集団と対峙する陣形になったら、左耳の上に石がガツーンと当たった。ものすごく正確な直線軌道、ピッチングマシンによる投石だった。ヘルメットのおかげ、あと二センチ下だったら、そこで人生が終わっていたかもしれない。一九歳、二〇歳の学生集団、本気を出したバルタイに敵うわけがなかった。つづいてデモ行進、ところが路上は投石ゴロゴロ、わたしは躓いて捻挫、まったく歩けなくなった。隊列を離れたら、たちまち民青につかまつた。元衛くんの記事は、歩行困難だと思表示をしたところを、彼自身が近くで聞いたものと理解する。彼がいたことは知らなかったか、記憶の外だった。目隠しされて縛られて、かなりの時間、車でぐるぐる回る。どこに連れて行かれるのか、わからない。今から思えば、むこうは心理作戦など手慣れていた。伝統的ノウハウ・マニュアル通り、一年生など、たちうちできない。着いたところを、遠いどこかの地下室・密室のように錯覚していた。目隠しで縛られたまま、いすに座らされ、尋問された。ケガをした足を蹴つて、「何が、痛い！だ」とどなつて内出血で腫れている足を、さらに蹴り続ける。ふつうの学生ではない。敵の牙城、こんな所でリンチを続けられるのか。少しは抵抗もしただろうが、「自己批判」書を書いた。元衛くんによれば、適当な名前で署名したらしい。でもむこうはわかっていただろう。どこかで駒場寮の同室Kの声がした。「服部が自己批判したぞ」。民青側の「自己批判者続出！」なる宣伝に貢献した。

目隠しを外してみれば、何ということはない。駒場寮の寮食堂、自分の住まいだった。周りには自分と同じように、すわらされて査問される友人たちが多数いた。「どうして東大生ばかりなんだ」という発言に、「それしかないから当たり前だ」と、つぶやく人もいた。向こうは「なかは外人部隊ばかりだ」と説明されていたから、意外だったのだろう。同じ時に査問を受けていた一人を覚えていて。フランス語クラスのHくんだと思う。

その場から離れたが歩けない。階段を這つてあがろうとしたら、ボート部で通学生の山本真伸くんが通りかかつて、七〇キロを楽々おぶつて、三階まで運んでくれた。かれには感謝している（山本くんはそ

の後ミュンヘンオリンピックにダブルスカル種目の選手で出場）。ベッドで寝ていて、数日後に本郷・安田講堂落城のニュースをラジオで聞いた。気落ちしていた。

ボート部の部屋には、いられなくなつて出た。もとボート部員・平田仁志くんが在室する、松本深志高校出身者が主流の部屋に移った。みんなが「そうずら」といつていた。中坪清くんがEクラス（中国語履修）で、そのサロンでもあった。Eクラスは先生の藤堂明保教授をはじめ毛沢東派・全共闘シンパが多いクラスで、E斗のヘルメットが置いてあった。ここには浜下武志さんや九大法学府長となる植田信広さんがよく遊びに来ていた。偉大な東洋史家となる浜下さんはかなり年長だった。東大駒場自治会委員長として大管闘争（大学管理法案反対）でストライキを指導、停学処分から復学して、学生の信頼が篤く、尊敬の対象だった。

ボートで同室だったKとは、以前は仲がよかった。最近、下町で正義派弁護士として活躍していることがわかつたから、手紙を出したが、返事は来なかった。

全共闘運動は明治大学和泉校舎にて続けられた。亡命政権のようなものだ。自己批判書を書かされた後ろめたさはあったが、あんなものはいくらでも書けばいいと仲間はいった。入試が中止になり、4・28沖縄闘争では多くの友人が逮捕された。うち一人はこの文集に寄稿してくれている。運動は低調になった。その後、二年下で下級生が来るころまで、一応は続けていて、教室に行つてビラまきもしたが、まもなくやめた。下のクラスに入学してきた、大人びた好青年だった金築寛さんは革マル派で、のちに内ガバで他大学構内にて殺された。

下のクラスが金築さんの追悼文集を作ろうとしたが、「死んでも金築は革マル派の人間だから」といって、党派から断られたそうである。内田樹（転向について）『「おじさん」的思考』に、内田の親友である金築くんや司令塔だった上記のHくんが登場していた。Hくんは一九七三年頃、交番前に顔写真が貼られていたとある。奈良出身の物静かな青年だった。わたしは聞き取りをしていて、対立セクトにいた人物から、金築くんについての話を聞いたことがある。

健康診断のたびに、十二指腸潰瘍痕と指摘される。胃に穴が開いたのは、四十五年前、否定した大学に戻れるのか。答えを出せない。八本のへやで、いっしょにいた四人のうち、一人は中途退学し、岐阜県大垣市で徳山ダム反対運動事務局の中心になった。もうひとり四・二八で逮捕され、のち政治活動に専念した。彼も卒業した形跡はない。わたしの助手時代に、オルグのため下宿に訪ねて来た。どこかの党派に属していたようだ。「われげばる、故にわれあり」、もともと詩人の才能がある人だったけれど、機械的な言葉をくり返して、だれがきても同じことをいうだろう、といっていた。その後の消息はわからない。残り一人は卒業して、高校の先生になった。かれにはあつてみたいけれど、あったことはない。

進学した頃のことを思い出せないが、レポートは出さなくても単位をくれるような状態だった。正確に言えば、中間にレポートを出していたら、期末のレポートが未提出でも単位をくれた。大学当局はともかくも進学させる方針だった。本郷から石井進先生や尾藤正英先生がきて、進学前に読むべき本をあげた。石母田正『中世的世界の形成』、古島敏雄『近世日本農業の構造』『日本農業技術史』、丸山真男『日本政治思想史研究』など。駒場はもうイヤで、本郷に早く行きたいと思った。

ベトナム戦争にみる理不尽な世界構造があつて、日本も一員として荷担していた。学生の異議申立は

すこぶる自然な意思表示だった。ただ運動は反社会的で、何でも否定し、それを正当化した。戦術も破滅的で、敵も定かではなく、未熟で幼かった。有為な若者が犠牲者になった。けれど、あの時代には学生はみな突き動かされていた。その後の自分があの心を裏切ったことはない。一生をかけて答えを出す。運動に参加した人は、みな、そういう気持ちで生きてきたはずだ。いつかあの時代を冷静に考えたい。何にも怒ろうとしない若者が、わたしは理解できない。